

文 化

日本の本州の山の水は太平洋と日本海のどちらかの側に流れていく。分かれ目となる尾根、すなわち分水嶺は青森から山口まで一本の線でつながっており、長さは約2800キロに及ぶ。昨年、私はついにそのすべてを踏破した。多くの人の協力を得ながら、完走には39年を要した。

▲△△
登山ルートが偶然一致
登山には学生時代からのめりこんでいた。分水嶺を歩き始めたのは神戸もあった。雪

製鋼所に入社した4年後、東京に転勤した1970年のこと。最初は奥秩父の甲武信岳だった。といっても当時は自覚がなかったが、意識するようになったのは76年。東北の八甲田連峰を訪れていたときだ。自分がたどってきたルートが分水嶺に重なることに気がつき、このまま歩いていこうと思いついたのだ。



尾根からの眺めは何にも代え
難い(中部地方の鷲ヶ岳)

た笹竹が突き刺さる痛みは相当なものだ。
2008年3月に歩いた中部地方の鷲ヶ岳では、左右が急峻な崖となり前進できなくなっていた。なんとか迂回したが、分水嶺に戻って地図を見ると、3時間も要したのに5〜6分しか進んでいなかった。
分水嶺は大体、縦走を

◇山の美しさにひかれ、分水嶺を39年かけ単独完走◇
細川 舜 司

本州の背骨 2800キロ踏破

が硬くしまっていて、カ
ンジキなしでも快適。通
常の尾根歩きでは、水く
みに難儀するが、雪を溶
かせばいい。
案なことばかりではな
い。1人でテントを持つ
て行くと、大体3泊4日

始める地点までたどりつ
くだけでも一苦労。岐阜
と福井の県境の奥美濃の
最も奥にある能郷という
集落から、目的の峠まで
は国道を歩いて1日では
たどりつかなかった。
△▲△
道に迷い危うく遭難
単独登山の心細さもある。
場所によっては仲間
と同行したこともあるの
で分かる。2人いれば心
強いが、1人だと何より
道に迷った時が困る。



1996年11月、京都
の北山に入った時がそう
だった。京都大学の山岳
部がよく行く山として知
られ、高さは1000キロ
に満たない。油断もあっ
たのか。夕方、テントに

荷物置いて、もう少し
行ってみようと思いきや
たところ、古い林道に迷
い込んでしまった。
地図も磁石も持ってい
るのだが、これという目
印が見つけない特徴の
ない山域なので、自分の
居場所がどうにも分から
ない。小一時間の散策と
高をくぐっていたので、
ヘッドランプはない。非
常食もない。「遭難」の
2文字が頭をよぎった。
結局、その夜は大きな
杉の木の下でまんじりと
もせず一晚を過ごした。
焚き火が心を落ちつかせ
たが、翌朝、明るくなっ
てから周囲を歩き、よう
やく道標を見つけた。
会社勤めのころは時間
に余裕もなかった。山に
こもるわけにはいかない
ので、休日にならぬよう歩
を進めた。線をつなぐに
は、以前降りた地点に戻
って、登らないといけな
い。タクシーは高いので、
なるべくバスを使うが、
地方の経済は近年どこも
厳しく、バス路線は減少
の一途。その分、歩かな
ければならない。
97年に退職するまでは

ペースが遅く、全体の半
分くらいしか進めなかつ
た。会社は定年でさぼっ
と辞めた。その後は鳥取
の実家で高齢の母の世話
をしながら、主に中国地
方の山に足を運んだ。
△▲△
妻が終点で出迎え
ついに完走したのは昨
年4月。終点となった広
島の田野原には妻が出迎
え、感動を分かち合った。
家族には迷惑をかけた。
休みとなれば山に飛んで
いく。満足に自宅にいた
ことがない。子供は私が
年中忙しく働いていると
思っていたようだ。5月
の連休でも自宅にいたの
は一度、山スキーで脚を

折った時くらいだ。
私自身は地図に印をつ
けて、だんだん埋まって
いく過程が楽しかった。
だが後に続く人は出るだ
ろうか。この40年間で日
本の林業は次第に衰退し
て道は消え、やぶも深く
なったに違いない。今の
若い人が「やぶごき」に
耐えられるかも疑問だ。
それでも尾根を縦走し
て豊かな自然を眼下に眺
める快感は代え難い。私
の歩みは、このほど「日
本の『分水嶺』をゆく」
(新樹社)という本にま
とめた。分水嶺登山の魅
力的一端を伝えられれば
と願っている。(ほそか
わ・しゅんじゅん登山家)